

氏名(本籍地)	恒安 眞佐(千葉県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	乙第74号		
学位授与年月日	平成28年3月16日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第2項該当		
論文題目	The Relationships Between Proficiency and L2 Learning Variables: Personality, the Willingness to Communicate, and Motivation		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	ロブソン・ゴードン
	(副査)	昭和女子大学教授	金子 朝子
		昭和女子大学教授	小川 喜正
		目白大学教授	岡 秀夫

## 論文要旨

第二言語としての英語習得の領域において、学習者がより効果的に第二言語を習得する方法に関する研究は数多い。個々の学習者に目を向けた授業の構築・実践を目標とする場合、学習者の性格や学習スタイル等の個人差を知ることは教員にとって重要であり、それに伴うカリキュラム開発や指導法の改善など、色々な教育的応用がなされている。

しかしながら、複数の要因と言語能力の関係についての研究の中で、英語を学ぶ日本人大学生を対象とした研究はほとんど見られない。よって本論の目的は、第二言語としての英語習得に関する複数の要因と言語能力(第二言語を運用する能力)の関係を明らかにし、それを大学英語教育に資することである。複数の要因として、性格・コミュニケーションの意思(WTC)・動機を取り上げ、言語能力は認知学力的言語能力(cognitive academic language proficiency: CALP)と基礎的対人伝達スキル(basic interpersonal communicative skills: BICS)を測定した。以下が6つのリサーチクエスチョンである。

- (1) 性格と学力の間にどのような関係があるか。
- (2) WTCと学力の間にどのような関係があるか。
- (3) 動機と学力の間にどのような関係があるか。
- (4) 性格とWTCの間にどのような関係があるか。
- (5) 性格と動機の間にはどのような関係があるか。
- (6) WTCと動機の間にはどのような関係があるか。

研究手法は、3つの要因(性格・WTC・動機)に関しては質問紙を実施し、CALPに関し

ては TOEIC、BICS に関しては一連の絵を見て物語を英語で描写するタスクを実施し、統計ソフト（SPSS）を用いて分析した。結果は以下の通りであった。

- (1) 内向的な性格を持つ学習者の発話量は少なく、BICS が低い。
- (2) WTC が高い学習者は、友人や知り合いの間では発話量が多く、流暢になり BICS が高い。WTC が低い学習者は、グループのような公共の場や見知らぬ人との間では発話量が少なく、流暢ではなくなり BICS が低い。
- (3) 動機が高い学習者は、流暢ではなく BICS が低い。
- (4) 外向的な性格を持つ学習者は、友人や知人と積極的にコミュニケーションを取り WTC が高い。内向的な性格を持つ学習者は、見知らぬ人とコミュニケーションを取るのを嫌い、WTC が低い。
- (5) 内向的な性格を持つ学習者の動機は低い。

総体的に見て、動機が高い学習者は、あらゆる会話の場面で積極的にコミュニケーションを取り WTC が高いと言える。

以上の結果を踏まえて、学習者がよりよく学べる学習環境を提供するためには、教員が学習者の複数の要因に目を向けることが重要であると考えられる。こうすることによって、一人の学習者を総合的に概観し、学習者要因と英語力相関関係を探求し、個人差に関する理論的な知識をもとに柔軟なアプローチが可能になる。学習者全員の第二言語としての英語習得に関わる要因を考慮して授業を実践することは不可能であることはいままでもない。また、個人差のどの適性が英語学習に関して最適であると断言できない。しかし、教員にとって本論で示した3つの要因と学力の関係は学習者の学習機会を最大限に生かすことのできる、より良い授業を実践するための大切な情報であると考えられる。

第二言語習得に関わる複数の要因と学力の関係の研究はほとんど見られず、本論は当該の研究領域において新しい可能性を拓くものであると考えられる。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、申請者自身の教授法を見直し改善すべく、さまざまな学習者を対象に第二言語習得に関する複数の要因と学力の相関関係を検証したアクションリサーチである。

はじめに調査協力者である大学生の英語の学力レベルを認知学力的言語能力（CALP）と基礎的対人伝達スキル（BICS）の2つに分類して検証した。TOEIC は CALP を、一連の絵を見て物語を英語で描写するタスクは BICS を測定する適切な手法として用いた。その結果、TOEIC の平均値は350点であり、英語で描写するタスクで発話された英語は、文法的な間違いや長いポーズも多く、日本語交じりであり、学習者の CALP と BICS はとも

に低いことが明らかになった。そこで申請者は学習者をよりよく理解し、効果的な授業を提供するために彼らの英語学習に関する重要な要因（性格・コミュニケーションを取ろうとする意思（WTC）・動機）を検証することが重要であると考えた。

性格に関しては、Yatabe-Gilford (YG)性格適性テストを使用して測定した。その結果、劣等感を持ち、情緒不安定な学習者が多いことが明らかになった。WTCに関しては、友人と個人的に話すことを好む学習者が一般的に多いと考えられる一方で、本研究に参加した学習者は、グループや会議で見知らぬ人と話すことを好む傾向があるとわかった。動機に関しては、無関心度が低い学習者は、発話量が少ないことがわかった。また、内発的動機や外発的動機もそれほど高くないことを明らかにした。これは学習者の英語学習に関しての興味が低いにもかかわらず、義務教育で数年間、英語を履修してきた多くの大学生の実態を浮き彫りにしている。つまり、高等学校では英語教育に全く否定的であったとは言えない多くの学習者の動機が、大学生になり低下してしまったことを示唆している。

本研究の特徴として、以下の四点を挙げる事が出来る。本論文で学習者の個人差（ID）として取り上げた3つの要因（性格・WTC・動機）とTOEIC（CALP）の相関関係は見つからなかった。これは、先行研究と同様の結果となった。ID分野の課題は、さまざまな要因が明確に定義されておらず、適切な測定方法が確立されていないことが原因である。本研究では、その問題点を考慮して調査、検討した。つまり、3つの要因を定義し、妥当性、信頼性のある質問紙を使用した。これが本研究の特徴の1つ目である。

また、学力の測定にはBICSで発話量と流暢さを用いて各種の分析を行った。BICSを用いた理由は、筆記試験だけでは測定することができない学力が含まれているからである。口答試験（発話量や流暢さを測定するタスク・BICS）は、一斉試験（TOEIC・CALP）より厳密に学習者の運用力を測定できることに着目した。これが本研究の特徴の2つ目である。より正確な測定方法を用いたという点で評価に値する。

精神不安定という性格特性を持つ学習者の発話量は少ないという結果も明らかにされた。当然の結果と考えられるが、これらの結果を言及した先行研究は少ない。WTCに関しては解釈の難しい結果がいくつかあるが、コミュニケーションの相手とコミュニケーションを行う環境が複雑に影響し合うことが明らかにされた。三つ目の特徴は、WTCの質問紙と学力の相関関係を検証した点である。見知らぬ人が集まるグループ内では学習者の流暢さが増し、友人間では発話量が減り、流暢さも無くなることを明らかにした。動機に関しては、動機の高い学習者の発話は流暢さに欠けることがわかった。また、内発的動機・外発的動機のいずれかの動機が低い学習者も同様に流暢ではないことが明らかとなった。理論的な視点から、本研究は、どのようにWTCと動機が口頭運用力に関係するかについての知見の構築に貢献したと言えよう。

最後に、IDに関する複数の要因を比較したことが本研究の最大の特徴である。性格・WTC・動機の要因を対象とし、学力との相関関係を検証した論文は見つからない。しかしながら、本論文においても3つの要因の関係についての検証は十分とはいえないため、さ

らに掘り下げる必要があることを今後の研究の発展に資する助言としたい。経験的な研究結果がほとんどない中で、本研究はどのようにこれらの要因が関係しているかについての貴重な貢献となっている。

こうした課題もあるが、本論文で実証的に明らかにされた成果は、第二言語習得研究及び、日本のこれからの英語教育に有益な示唆を与えるものと言える。

本論文の審査は、学外審査員を含む4名の英語教育を専門とする審査員により行われた。第1回の審査会では何点かの修正箇所の指摘が行われた。第2回の審査会では、第1回の指摘に基づき修正された論文の修正箇所の確認を行い、第3回の公開審査会の実施となった。審査員一同は、本申請論文に対し詳細な検討を加え審議した結果、本論文が、（1）自らの授業を振り返るために、まず学習者をよりよく理解する、（2）学習者の第二言語習得に関する重要な複数の要因を取り上げ、学力との相関関係を検証する、（3）学習者により効果的な授業を提供する、といったアクションリサーチという新しい視点に立った優れた論文であり、第二言語習得研究および英語教育学の双方に貢献する論考は、博士論文としてふさわしいと判断した。よって審査委員会は全員一致で、申請者を本論文による博士（文学）の学位授与に値するとの結論に達した。